

中学校国語・古典導入のための教材と授業 — 「見ぬ世の人」と出会い、声を聞く —

背景 生徒の古典嫌い
教師の古典への拒否感
変化のない教材と授業内容

課題 実物またはそれに近いものに触れさせる機会を設定する
単発の内容ではなく3年間を通した学習課程を構築する
生徒が生涯学び続けるための基礎となる活動を取り入れる

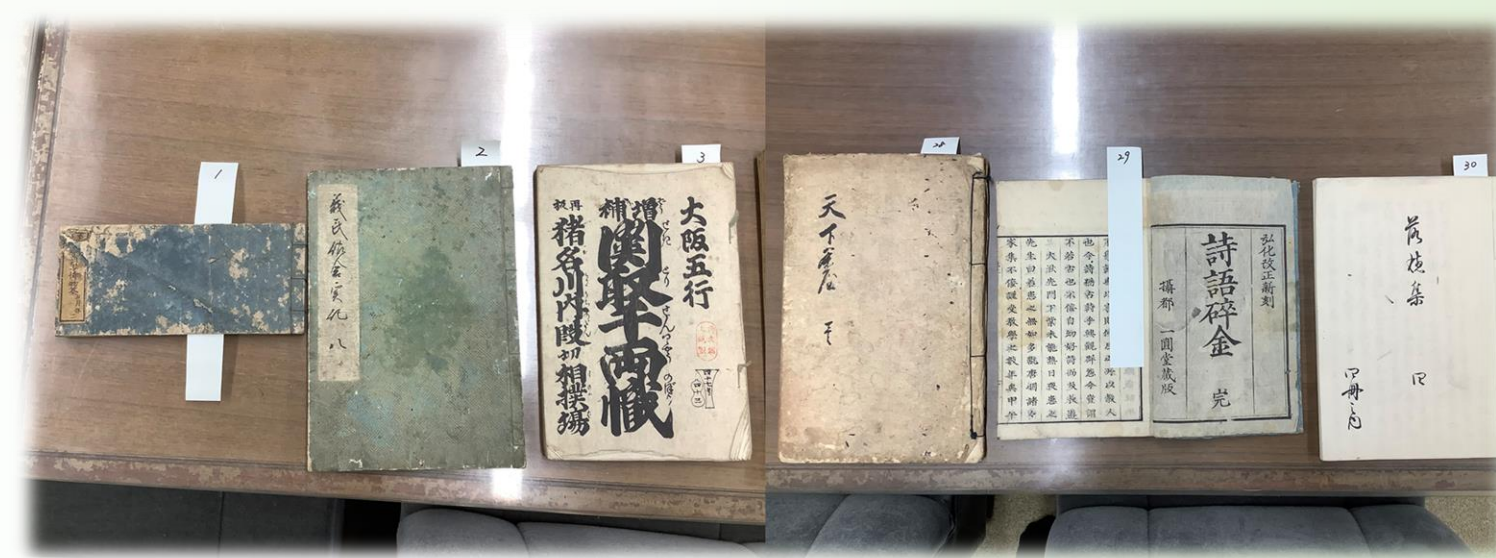
「見ぬ世の人」に出会おう

1. 「書物の歴史」を授業者が概説する。
木簡 → 卷子 → 版本（板本）



2. 実際の写本・版本（板本）を手に取り観察する。

①各自1冊ずつ。
最初は個人で指示
や助言のない状態
で観察する。



②授業者から「観察のポイント」を伝えるとき
ともに周り意見交換や相談をしながら気づいた
ことをワークシートに書く。

3. 座席の前後で資料を交換して、
2.同様に観察する。



4. クラス全体で気づいたことを中心
に意見や感想を共有する。

5. まとめ
個人でワークシートを確認し、感想等を記入する。

「見ぬ世の人」の声を聞こう

1. 日本語の音声と文字の歴史を授業者が概説する。

①音声言語と記録言語
②言葉や音韻の変遷
③江戸後期の話し言葉を『按古於當世』から「月
日の出会ひ」で例示

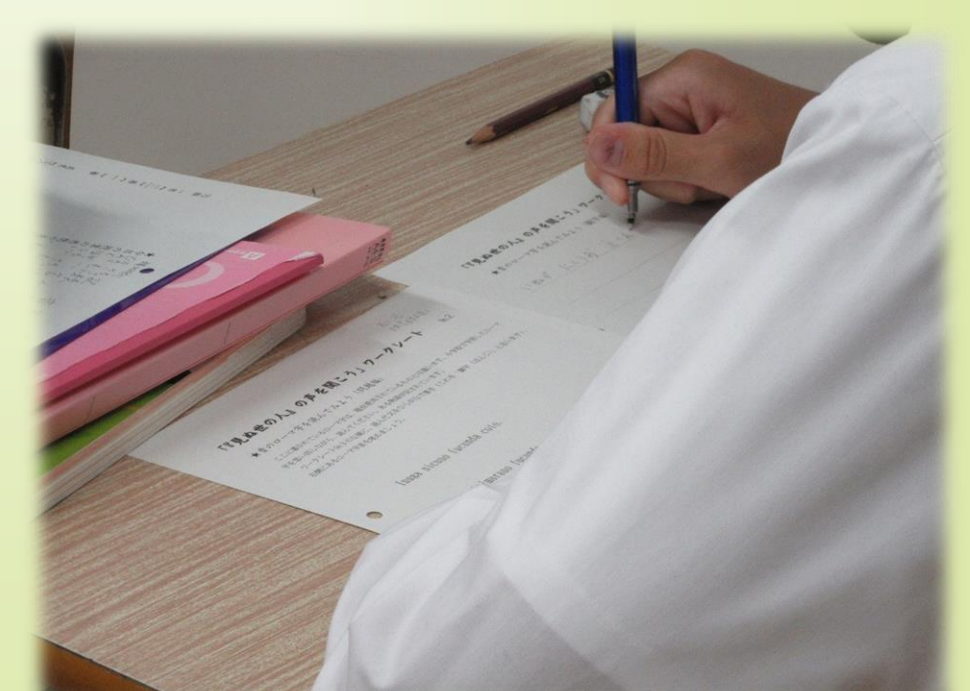
2. 『天草版 伊曾保物語 ESOPONO FABVLAS. 【エソポ
のハブラス】』の中から「Inuga nicuuo fucunda
coto. イヌが肉をふくんだこと」を翻字しながら、
ローマ字表を作る。

3. 同じ文章の別版を比較し、
特徴や差異について考える。
『古活字版伊曾保物語』
『万治絵入本伊曾保物語』



4. 『天草版 伊曾保物語』が
出版された理由を考える。
授業者から以下の3点について
助言・概説する。

①江戸時代まで“話し言葉”
と“書き言葉”が別であった
こと
②明治中期の「言文一致運動」
③言葉から見る日本の近代化
や公教育制度等との関係



5. まとめ
個人でワークシートを確認し、感想等を記入する。

実物またはそれに近いものに触れさせる機会を設定する

「2冊見比べてみて、紙の質や使われている文字も全然ちがった」
「昔の書物ってすごいフワフワしているんだな」
「実際に物にふれたりすることで、データだけでは分からない昔の本の重みを感じることができてよかった」

「古典」は現在と地続きでつながっているもので、断絶していない。この「つながり」を実感をともなって明確にすることで、生徒は「古典」が自分に「つながる」ものとしてイメージできると考える。

単発の内容ではなく3年間を通した学習課程を構築する

「今回は俳句？の本だったので、医薬の本も読んでみたいです。」
「次、古い資料と関わる機会があれば 現在の本と比べてみたいです。」

中学校国語で「古典」を学ぶ理由として、今の自分が読み・書き・話し・聞いている「ことば」の源泉がそこにあり、その源泉に触れることで、先達が育ててきたことばが持つ豊かさを知ることができる。

生徒が生涯学び続けるための基礎となる活動を取り入れる

「こういった書物がたくさん残っているからこそ、私たちも昔のことを知れるのだなと思いました。」
「いつかこの文字を解読して読めるようになりたいなと思いました。」

中学校段階で古典が持つ面白さや奥深さに触れる機会があれば、子どもは卒業後生きていく中で、その記憶、経験につながるモノ・コトを意識することができ、それを知り、深めようという意識へとつながっていくと考える。

中学校国語・古典導入のための教材と授業

—「見ぬ世の人」と出会い、声を聞く—

小村 典央 [大阪教育大学附属平野中学校]

小村 利絵 [大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程]

はじめに

今回の発表は、中学校の国語科において生徒に興味・関心を持たせるとともに、現行の学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」を促すことができる古典の導入教材の開発についての詳細である。

中学生は古典をなかなか好きになってくれない。私が教師になった頃は、古典の授業になると生徒の学習意欲が極端に下がるのを目の当たりにし、どうすれば興味を持ってくれるかと悩んだものである。生徒からも「本文を読んでも意味が分からない」「歴史的仮名遣いが分からない」といった不満の声や、「なぜ普段使わない古典を勉強しなければならないのか」といった疑問の声を何度となく聞かされた。それを裏付けるように、さまざまな調査でも「古典は好きですか？」という問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合は3割に満たないという結果が出ている。^{*1}

なぜここまで古典が嫌われるのだろうか。その理由として「古典は難しくて、面白くない」ことからくる拒否感を生徒が抱いていることと、教える側の教師も同様の思いを抱いていることが考えられる。また、現行の教科書に掲載されている古典教材をみると、掲載作品にはほとんど変化がない。そのため、教師も例年同じような授業を実施できる時間として、例年変化のない授業をすることが多いと考えられる。^{*2}

それでは、生徒の古典に対する抵抗感を少なくするためにはどのような方策が可能だろうか。私はそ

¹ 平成25年度の「全国学力・学習状況調査」において、中学生に対する新規質問事項「古典は好きですか」に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答したのは合計で29.3%。

文部科学省、国立教育政策研究所『平成25年度全国学力・学習状況調査報告書一質問紙調査』平成25年8月、12～14頁。国立教育政策研究所ホームページ

<https://www.nier.go.jp/13chousakekkahoukoku/data/13-questionnaire.html>（最終閲覧日：2021年10月25日）

また、高校生についても平成17年度の「高等学校教育課程実施状況調査」において「古文は好きだ」の質問に、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答したのは合計で23.1%。

国立教育政策研究所『平成17年度高等学校教育課程実施状況調査—ペーパーテスト調査集計結果及び質問紙調査集計結果』2007年4月、137頁。国立教育政策研究所ホームページ

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/h17_h/05001000040007004.pdf（最終閲覧日：2021年11月26日）

² 日本学術会議の『提言 高校国語教育の改善に向けて』の中で、高校生の古典嫌い・無関心を生み出している主な要因を「教師側にも生徒側にも根強く存在する、品詞分解と現代語訳に終始する固定的で受動的な授業形態にある。」と分析している。

日本学術会議 言語・文学委員会 古典文化と言語分科会『提言 高校国語教育の改善に向けて』令和2年6月、14頁。日本学術会議ホームページ <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t290-7.pdf>（最終閲覧日：2021年10月25日）

の課題に対してこれまで、①.「古典を身近に感じさせること」、②.「少しでも継続して興味関心を持たせること」、③.「自ら学ぶ姿勢を育てること」の3点を中心とした教材開発に取り組んできた。その結果、「実物またはそれに近いものに触れさせる機会を設定すること」、「単発の内容ではなく、3年間を通した学習課程を構築すること」、「生徒が生涯学び続けるための基礎となる活動を取り入れること」の3点が必要であると分かった。そして、この3点を古典導入の授業においてできる限り満たす教材の一つとして考えたのが、今回の発表で紹介する授業と教材である。

今回の授業は基本的に、「中学1年生を対象とした全2時間の授業」として実施されることを想定している。しかしながら昨年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、現在の中学2年生にこの授業を実施できなかった。そのため中学1年生に先だって、同じ内容の授業を実施した。また、今年度は私が日々の授業を担当していない学年のため、各学年とも2時間ずつを臨時に担当する形で実施した。なお、今回の授業は、現行の学習指導要領における三観点のうち、「主体的に学習に取り組む態度」を評価するのに適したものと考えている。ただし今回は教材の提案が主であるため、評価基準や指導と評価の計画の具体例についてはふれない。

1. 第1時 授業実践概要 ～「見ぬ世の人」と出会おう～

①. 第1時の基本方針と設定

第1時は「見ぬ世の人」に出会おう」と題して、実際の古典籍を手にして観察する機会を設定した。これは、「見ぬ世の人」が手にしていたものと同じものを、時代を超えて手にすることで、その資料を視覚・嗅覚・触覚などで感じてもらうとともに、その資料が経てきた歳月に思いをはせ、背景などを想像してもらうことで、古典を身近に感じてもらうとしたものである。授業の実施日および対象は以下の通りである。

1年生：令和3年（2021）10月7日〔木〕、108名〔36名／クラス〕

※2年生：令和3年（2021）7月5日〔月〕、107名〔35～36名／クラス〕

本時では、江戸時代から明治時代にかけて筆写・出版された古典籍を1クラスの人数分用意した。これらは私が長年収集したものである。その内容は、読本をはじめ浄瑠璃の床本や俳諧書、また経済や和算、法律などと多岐にわたっている。本来、国語科で取り扱うのであれば文学に関係する書物を提供することが求められるかもしれない。しかし、ここで生徒に求めるのは「古典籍とはどのようなものかを知ること」であり、いくつかの分野のものに触れて比較できたほうが、より多くの疑問点が出てくるのではないかと考えた。^{*3}

②. 授業の詳細

a. 導入

導入は10分で設定し、「書物の歴史」を説明した。主な内容は以下の通りである。

- ・木簡の模型〔1枚だけと5枚を紐で綴ったもの〕を提示し、漢字「冊」「巻」の語源を説明。^{*4}
- ・卷子の複製品を提示し、書物の様々な形態について説明。
- ・板木の実物とそれを用いた印刷物を提示し、版本（板本）と写本について説明。^{*5}

³ 今回使用した書名は、参考資料「見ぬ世の人」に出会おう 使用古典籍一覧」を参照のこと。

⁴ 木簡模型の制作については、技術科の先生と大学院生にご協力いただいた。

書物の変遷をイメージしやすいよう、説明は時系列に沿った形でおこなうよう努めた。

ｂ．展開

展開は 35 分で設定し、実際に本物の古典籍を手にとって観察する時間とした。時間は事前説明（5 分）・観察〔前半〕（10 分）・観察〔後半〕（10 分）・意見交流（10 分）に分けた。古典籍は種類の異なる 2 冊を手にとれるように組み合わせて配り、それぞれには番号を記入した短冊を挿んだ。生徒にワークシートに短冊の番号を記入させることで、後でワークシートを評価する際、どの古典籍を手にとったかが分かるようにした。

古典籍を配る前には、以下の注意事項を説明した。^{*6}

- ・古典籍のほとんどが実物の写本なので、丁寧に扱うこと。
- ・資料を見る際は、インクを用いた筆記具やシャープペンシルを使用しないこと。
- ・ワークシートへの記入は、必ず鉛筆を使うこと。
- ・資料を無理に開かないこと。
- ・資料に挟んだ短冊（資料番号を記載）を取らないこと。

その後、古典籍を配り、あらかじめ時間を示してから観察させた。最初は個人で、指示や助言のない状態で観察させ、5 分をめやすに授業者から「観察のポイント」を伝えるとともに、周りとの意見交流や相談をしてもかまわないという指示を出した。「観察のポイント」としては、内容を読解する（何を書いてあるかを読む）だけではなく、古典籍の表紙やページ、綴り糸、貼紙、ページの文字などを実際に見たり触れたり嗅いだりして、思ったことや感じたことを記すよう促した。10 分をめやすに手元の古典籍を座席の前後の人で交換するように授業者が指示を出した後、同じ過程で観察させた。

観察〔後半〕の終了後、全体から気づいたことを中心に、意見や感想も含めて共有する時間をとった。発言内容について、情報の補足が必要な場合は、授業者が適宜おこなった。

ｃ．まとめ

まとめは 5 分で設定し、ワークシートの確認と感想などを記入する時間とした。また、次時の連絡などを口頭でおこなった。

③．生徒の反応 ― 授業時の様子とワークシートから ―

生徒は最初緊張していたが、導入では「冊・巻」の成り立ちの説明や、卷子や板木の提示に対して驚きの声や表情がみられた。展開では本物の古典籍に触ることにためらっていて、最初の 5 分は本のページを開く手も恐る恐るであった。しかし、「観察のポイント」を伝えた後は、書かれている文字を読もうとするためだけでなく、指先で紙の質を確かめたり、匂いを嗅いだり、ペーシの間に挟まっている用紙を取り出して眺めたりと、興味深く観察する様子がみられた。また、周りの人たちとも意見を交わしながら、お互いの疑問を話し合ったりする姿も見られた。

生徒がワークシートに記した感想などを以下に記す。[傍線は発表者による]

⁵ 板木の現物は、本ではなく薬の広告の板木である。印刷物は板木を傷めないよう、墨ではなくカーボン紙を使用した。

⁶ 実際の文言は、参考資料のワークシートを参照のこと。

- ❖ 2冊見比べてみて、紙の質や使われている文字も全然ちがったので、書かれた時期やだれが書いたかで、変わるのだと思いました。色んな文字を見れて、中には知っている文字もあって面白かったです。
- ❖ 実際にこのような昔の本を手取ることはほとんど無いけいけんで、とても新鮮でした。文字は時代をこえて人に伝えられるということを身近に感じられて、とてもよかったです。次回もとても楽しみです。
- ❖ 江戸時代、明治時代では日本の勉強の学習率はとても高かったことを知りました。こういった書物がたくさん残っているからこそ、私たちも昔のことを知れるのだなと思いました。どのくらいの時間をかけて制作されるのか知りたいです。
- ❖ 100年以上たつ事でこれだけ変わるんだと思った。今は印刷で、手書きのものなんて中々ないけど、100年以上前は、当たり前のように、一文字一文字自分で書くという気の遠くなるような作業をしていたと思うとすごいなと思います。
- ❖ 書物から、昔の人が使っていた文字や生活を読み取れると分かった。実際に書物を見て…昔の人の文字はうねうねしていて読みにくく、分からない漢字も多かった。実際にさわったことはなかったから、昔の書物ってすごいフワフワしているんだなと思った。
- ❖ 色々な本が昔から沢山あり、虫に食べられたり、こわれてしまったりしながらも、今まで残っていることがすごいなと思いました。もしこの文字が読めたらなあと思いました。とてもおもしろそうでした。
- ❖ よくわからない文字ばかりでしたが、新せんな感覚ですごかったです。同じ日本なのに、年代の差で字にもものすごく変化していると思うとおどろきます。もし読めるようになったら、この昔の人の考えなどを知りたいです。
- ❖ 古典はいろいろなことがあるんだなと思ったし、自由だなと思いました。
- ❖ 今まであまり古典などに興味がなかったが、今回で一気に興味がわいた。
- ❖ 古典は難しく苦手だったから正直あまり楽しくなさそうだったけど、読んでみると面白かった。
- ❖ 私は、今回ほぼ初めて昔の本に触れてみて、現代の本よりもすごくせんさいだなと感じました。文字は全然わからなくてニュアンスだけで読んでいたけれど、とても面白かったです。今回は俳句？の本だったので、医薬の本も読んでみたいです。
- ❖ もっと古典籍を読んで解説したいと思った。
- ❖ こんな物、じっくり見たことなかったし、さわったこともなかったので、こんなきかいがあってよかったです。今の本とはちがって、ふりがながふってあるのは、読みやすくいいなあと思いました。
- ❖ と中から参加したが年季の入った物があって「すご！」と思った。どんな人が書いたのか想像したがあまり思いつかず、なんて書いてるのかもわからなかったが、ペラペラの本にすごいみりよくを感じました。
- ❖ 昔の本といっても、書き方や、字の感じなどが全然違っていて、読み仮名がふっていたり、修正液で修正されていたりして、面白かった。今と同じようにページが書かれていたり、人物について書かれているものがあって、同じ部分もあるんだと知った。
- ❖ 昔に使っていた文字や今も使っている文字で、今の時代に生きていない人の文字を読むことができてよかったです。実際に物にふれたりすることで、データだけでは分からない昔の本の重みを感じることができてよかったです。音声では残ってなくても、書き残すことで、未来につなげていけることが分かりました。
- ❖ 何百年も前に生きていた人の本を読んでいると思うと、とても不思議な気持ちになりました。自分が生きていない時代のことを知れる文字はすごいと思いました。
- ❖ 昔の書物に触れてみて字は読めませんでしたが、色々なことが想像できてとても楽しかったです。

2. 第2時 授業実践概要 ～「見ぬ世の人」の声を聞こう～

①. 第2時の基本方針と設定

第2時は「「見ぬ世の人」の声を聞こう」として、16世紀後半のローマ字を翻字する機会を設定し、「見ぬ世の人」が話していたであろう言葉を解読することによって、古典を身近に感じるとともに言葉の変遷に気が付いてもらおうとしたものである。授業の実施日および対象は以下の通りである。

1年生：令和3年(2021)10月19日[火]、108名[36名/クラス]

※2年生：令和3年(2021)7月6日[火]、107名[35～36名/クラス]

本時では、文禄2年(1593)に天草のイエズス会学林で刊行された『天草版 伊曾保物語 (ESOPONO FABVLAS. 【エソポのハブラス】)』を教材に用いた。^{*7}

この作品は、桃山時代の京阪地方の談話体口語文がローマ字で記されており、外国人宣教師が日本語を学ぶための書物として作られたとされている。^{*8} そのため、当時の日本人の話し言葉を知ることができる文献としても知られている。今回はこの中から「Inuga nicuuo fucunda coto.(イヌが肉をふくんだこと)」をテキストとした。この話はイソップ寓話の中でも比較的知られており^{*9}、話の筋を知っている生徒も多いと考えたからである。また、江戸時代前期に刊行された『伊曾保物語』の諸本3種類^{*10}を、比較する文章として提示した。これらは日本人もしくは日本語を理解する人によって記されたと考えられており、同様の本は江戸時代を通じて一般に普及し読まれていた。^{*11} その文体は『天草版 伊曾保物語 (ESOPONO FABVLAS.)』の口語体とは違い、他の古典と同様に文語体で記されている。

授業では、最初にローマ字で記されたテキストを読んで日本語(ひらがな)に書きかえる活動(翻字)をおこなわせる。これは普通の古典と違った形の教材(謎解きやパズルのような面白さを包含した教材)を使用することで、古典への先入観や抵抗感をできるだけ少なくし、生徒の興味・関心を促すことができると考えたからである。さらに教材と、その後に日本で出版された『伊曾保物語』の諸本とを比較させ、それぞれに見られる特徴や差異を考えさせる。また、古典文学が現在のように言文一致体でないことなどについても気づかせる。

また、この授業の活動は次年度につなげることも可能である。かつて授業者は、2年生の『平家物語』の「敦盛の最期」の授業で『天草版 平家物語』を使用し、教科書の本文とそれとを比較・分析する授業を実施した経験があり、生徒が意欲的に取り組んでいたことを記憶している。^{*12}

⁷ 今泉忠義編『ESOPONO FABVLAS (天草版伊曾保物語)』1959年、おうふう。445-446頁。

この本は活字版で読みやすいが、実物がどのようなものかを生徒に提示したい場合は、次の書籍が使用できる。福島邦道解説『天草版 イソポ物語 大英図書館本影印』1976年、勉誠社。39-40頁。

⁸ 新村出翻字『天草版 伊曾保物語』(岩波文庫)1939年、岩波書店、113頁。

⁹ 例えば、「よくばりないぬ」と題して絵本や児童書が発行されている。

堀尾青史 文、武部本一郎 絵『よくばりないぬ』(イソップどうわ絵本5)1966年、ポプラ社。

岩崎良信 等絵『イソップのお話』(オールカラー版世界の童話1)1966年、小学館。

¹⁰ 詳細は、後述(②授業の詳細b.「展開」B～D)。

¹¹ 武藤禎夫校注『万治絵入本 伊曾保物語』(岩波文庫)2000年、岩波書店。339頁。

¹² 福島邦道解説『天草版 平家物語 大英図書館本影印』1994年、勉誠社。「敦盛の最期」に該当する箇所は275-278頁に、「那須与一」に該当する箇所は335-338頁にそれぞれ記されている。

②. 授業の詳細

a. 導入

導入は 10 分で設定し、「日本語の音声と文字の歴史」を説明した。主な内容は以下の通りである。

- ・音声言語と記録言語（文字・絵）の特質を説明。
- ・縄文時代や奈良時代の言葉や音韻について、過去の研究などをもとに説明。
- ・江戸時代後期の話し言葉について、『按古於當世』から「月日の出会ひ」を紹介し、説明。^{*13}

音声言語や文字言語の変遷をイメージしやすいよう、説明は時系列に沿った形でおこなうよう努めた。

b. 展開

展開は 30 分で設定し、実際に『天草版 伊曾保物語 (ESOPONO FABVLAS.【エソポのハブラス】)』の「Inuga nicuuo fucunda coto.(イヌが肉をふくんだこと)」を解説（翻字）する時間とした。ワークシートは、活字に直した本文 (No.2) と、翻字スペース（左）とローマ字五十音表（右）(No.3) の 2 種類を配付した。なお、生徒には事前に、本文のローマ字表記が現在のものと異なることを説明した。また、翻字の際はひらがなで書く（漢字を使用しない）ように指示した。これは今回の翻字が文章の意味をとらえるためではなく、記述されている音声をとらえることを目的としているからである。

最初は個人で、指示や助言のない状態で解説させ、5 分をめやすに授業者から読み間違いやすい表記をいくつか伝えるときともに、周り意見交流や相談をしてもかまわないという指示を出した。

その後、解説の開始から 15 分をめやすに解説を一旦終了するよう指示を出し、ワークシート (No.4) を配付した。このワークシートには、以下の内容が記されている。

- 『天草版 伊曾保物語 (ESOPONO FABVLAS.【エソポのハブラス】)』の「Inuga nicuuo fucunda coto.(イヌが肉をふくんだこと)」の原文、翻字（すべてひらがな表記）、翻字（漢字仮名交じり文）
- 『古活字版伊曾保物語』巻中「十三 いぬとしむらのこと」^{*14}
- 『古活字版伊曾保物語』巻中「十三 犬と肉の事」^{*15}
- 『万治絵入本 伊曾保物語』巻中「第十三 犬、肉の事」^{*16}

A と B～D (『伊曾保物語』の諸本所収の文章) を比較させ、それぞれに見られる特徴や差異について考えさせた。

c. まとめ

まとめは 10 分で設定した。前半は『天草版 伊曾保物語 (ESOPONO FABVLAS.)』が出版された理由について考えさせた。ローマ字による本文記述が当時の「話し言葉」であることに気づかせ、江戸

¹³ 武藤禎夫 編『按古於當世』(古典文庫第 516 冊) 1989 年、古典文庫。

編者の解説によると、『按古於當世 (あごおとせ)』は 1807 年 (文化 4) に成立した落咄集であり、「月日の出会 (ひ)」は巻一の理屈編に収められている (66-67 頁)。なお、本文の表記については生徒が読むことを前提に、授業者が一部を改めた。

¹⁴ 『伊曾保物語 上中下合本』慶長元和頃。国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧、教材化にあたっては、本文を授業者が翻刻するとともに句読点を補った。

¹⁵ 森田武校注『伊曾保物語』[前田金五郎・森田武校注『假名草子集』(日本古典文学大系 90) 1965 年、岩波書店、所収] 405 頁。

¹⁶ 武藤禎夫校注『万治絵入本 伊曾保物語』(岩波文庫) 2000 年、岩波書店、88 頁。

時代までは「話し言葉」と「書き言葉」は別であったことを説明した。そして、明治中期の「言文一致運動」や、日本の近代化や公教育制度などについても解説した。後半はワークシートの確認と感想などを記入する時間とした。

③. 生徒の反応 — 授業時の様子とワークシートから —

第2時ということで、生徒もあまり緊張せずに授業に臨んでくれたように感じた。導入では縄文時代の音声言語の一例や奈良時代の母音の話^{*17}を聞いて、笑いや驚きの声があがった。ただ、『按古於當世』の紹介では、それほど反応がみられなかった。展開では自分たちが小学校で学習したローマ字との違いがどこにあるかを小さな声で発音しながら探り、本文を翻字し、ローマ字五十音表を埋めていく姿がみられた。周りとの意見交流や相談を認めた後は、小さな声でお互いに発音して確かめ合ったり、翻字したものを交換して確認したりと、積極的に解説してみようという姿が多く見られた。中にはローマ字の違いに興味を持ち、「総合的な学習の時間」の研究テーマにしようかと発言している生徒も見られた。生徒がワークシートに記した感想などを以下に記す。[傍線は発表者による]

❖ 言葉が持つ（与える）力はすごいということを知った。翻字が見たことのないローマ字だったので、難しかったです。

❖ 話し言葉も書き言葉も、時代によってさまざまな形に進化していると分かりました。

❖ 昔のローマ字を通して、昔の言葉の音、形を身近に感じることができました。また、話し言葉と書き言葉の歴史について知ることができました。

❖ 結構読解するのがむずかしかったけど、面白かった！

❖ 月日の流れで意思の伝え方、文字がかわっていったことが分かりました。

❖ 昔のローマ字を解読するのがすごくむずかしくて、全然わかりませんでした。話し言葉で書くということが分かって、古文がすごく楽しくなりました。

❖ 昔のローマ字を見たのは初めてだったけど、自分が知っているローマ字をもとに、読んでみると似たようなものはほぼほぼ読み解くことが出来、最初は読めなかったような字も読めるようになってきてほしいで理解し、最終的に自分の知っているお話だと気づくことが出来ました。また、分からなかった部分も読めるようにしたいです。

❖ 言葉は、縄文から奈良、方言から共通語と言葉は変っていくのが分かった。宣教師が日本語を勉強し、キリスト教を伝えたみたい、言葉は大切だと思った。

❖ ローマ字が今のところどころ違って難しかったです。話し言葉と書き言葉が違っていたことを初めて知りました。

❖ いろいろな時代の人の言葉についてよく分かったし、母音の数や、話し言葉、書き言葉など時代による考え方の違いがあるということが面白かった。

❖ 正直最初は昔のローマ字を読むなんて、めんどくさいと思っていたけれど、読み進めていくと、現代の意味とつながって行ってすごくおもしろかったです。家に帰ってもどんどん読み進めていきたいです。

¹⁷ 縄文時代の音声言語は、1980年代半ばに、使い捨てカイロのCMで使われていたものを紹介した。また、奈良時代には母音が8つあったという学説を紹介した。

◆ 江戸時代の時の人々の「国」の大きさがとても小さいのでびっくりしました。そして、藩などによって、言語がバラバラでおどろきました。

◆ 昔のローマ字と今のローマ字が全然違うかったし、母音が8つあったとゆうのも驚きました。昔の言葉と今の言葉のつながりも感じる事ができて面白かったです

3. 授業実践の課題と、解決のための方策

①. 授業者が実物を用意することの難しさ

今回の授業では、多くの実物(複製品や復元を含む)を用意して生徒に提示した。しかし、一般的に実物を用意することは、物理的理由や金銭的理由などで難しいと考える。それでは自分で購入したり制作したりせず、同様の授業を実践するにはどのような方策があるだろうか。

実はさまざまな方法で実物またはそれに近いものを用意することは不可能ではない。生徒が興味・関心を持つ古典授業の研究を私が始めた頃は所蔵する実物の数が少なかったため、授業の前半は図録などから選んだ古典籍の写真(書かれている文字の様子が分かるもの)を10種類提示^{*18}し、生徒にそれらを成立年代の古い順と刊行年代の古い順とに並び替えさせるゲーム的要素の強い取り組み^{*19}をおこない、後半は古典籍の実物を数冊用意して、回覧する形の観察方法をとっていた。また、現物が手元になくても、地域の図書館や博物館に協力を仰いで連携し、館が所蔵する書籍や収蔵品を提供してもらう方法もある。生徒が実物を直接手に取ることができることが理想であるが、それが無理でも複製品^{*20}や復元品を提供してもらったり、動画や写真の撮影を許可してもらったりして、それを生徒に提示することができれば、擬似的ではあるが実物にふれることはできると考える^{*21}。

②. 授業者が古典籍を解読することの難しさ

今回の授業では、生徒に古いローマ字の解読(翻字)をさせた。生徒に解読をさせるためには、授業者も解読できなければならない。しかし、古いローマ字は読むことができて、変体仮名やくずし字などで記された古典籍の解読(翻刻)は専門的な教育を受けていなければ難しいだろう。それでは古典籍の解読ができなくても同様の授業を実践するにはどのような方策があるだろうか。

現在刊行されている書籍(博物館や美術館の図録を含む)には、古典籍の影印とその解読文とが掲載されているものがある。また、有名な古典作品であれば、その影印本も比較的手に入りやすいし、活字文との照合も難しくない。私はこれまでも連綿で書かれた和歌の影印や、変体仮名で記された『竹取

¹⁸ 古典籍の写真については、博物館や美術館の展覧会図録や古典籍の影印本、国立国会図書館デジタルコレクションの画像データなどを使用した。

¹⁹ 年代順は「その画像の本がどうであるか」で判断させた。例えば成立年代が古くても、その本が刊行(写本の場合は筆写)された年代が新しい場合やその逆もある。写真以外にも影印本や謄本(現在でも和綴じのものがある)なども用いた。

²⁰ ぼるぷ出版の復刻日本古典文学館シリーズは、所蔵している公共図書館もあるので、比較的利用しやすいと考えられる。

²¹ 国文学研究資料館編『和書のさまざま』、和泉書院、2015年。

この資料は古典籍の概要を把握することができ、多くの写真が収録されている。ただし、付属のCD-ROMは動作環境設定の問題により、新しいパソコンでは閲覧できなくなっている。

例えば、今後はVRを用いて撮影した動画や写真を生徒に提示する方法なども取り入れられるだろう。

物語』の影印*²²をテキストとして、生徒に解説させる授業を実施しているが、刊行されている影印本は入手しやすいし取り扱いやすい*²³。解説の授業についても生徒の反応はよかったと記憶している。

③. 授業者が文字・音声の歴史に関する知識を得ることの難しさ

今回の授業では、文字や音声に関するさまざまな話やその歴史について、導入やまとめで説明した。

生徒に話すためには、印刷技術の歴史や音声言語の変遷などといった編年史的な理解と、木簡が使用された理由や天草版の本が日本に残っていなかった理由などといった個々の事象の理解とが必要となってくる。話の内容も多岐に渡るため、授業者側の知識集積のための活動が必要不可欠である。しかし、実際は時間的な余裕がないなどの理由で、授業者が知識を得る環境は整っていない。それでは授業者が幅広い知識を得るにはどのような方策があるだろうか。

授業者が幅広い知識を得るためには、何よりも学び続けることが大切である。そのためには日々の情報収集がカギとなってくる。例えば、博物館や美術館の常設展示はさまざまな情報を得ることに適した場である。また、文学のみならず歴史や自然、経済など幅広い分野の情報を得るためには、それらの情報が集積される公共図書館はよい場所である*²⁴。

4. まとめ

①. 実物またはそれに近いものに触れさせる機会を設定する

「古典」は現在と地続きでつながっているもので、断絶していない。この「つながり」を、実感をもたせて明確にすることで、生徒は「古典」が自分に「つながる」ものとしてイメージできると考える。

しかし現在、中学校の国語で取り扱う「古典」の多くは、教科書に活字で掲載された古文を教材としている。学習指導要領では、中学校で「古典」を学ぶ意義として、「中学校においても引き続き親しむことを重視し、その表現を味わったり、自らの表現に生かしたりすることに重点を置いて内容を構成」*²⁵と記されているが、活字化された本文にだけ触れていても、古典が醸成されてきた歴史や本来持つ面白さ、そのことば[発声言語・文字言語など]の豊かさに触れることは難しい。

②. 単発の内容ではなく3年間を通した学習課程を構築する

中学校国語で「古典」を学ぶ理由として、今の自分が読み・書き・話し・聞いている「ことば」の源泉がそこにあるからと考えている*²⁶。その源泉に触れることで、先達が育んできたことばが持つ豊かさを知ることができる。

²² 片桐洋一編『竹取物語 高松宮蔵』(新典社版原典シリーズ) 1972年、新典社。

²³ 古典籍の影印本は、和泉書院や新典社などから刊行されているものが入手しやすい。また、ぼるぶ出版の復刻日本古典文学館シリーズを使うことは可能だが、現在購入することは難しい。

²⁴ 情報を入手する方法の一つがチラシである。図書館には地域を中心とした講演会や講座などを案内するチラシが設置・配付されており、簡単に入手できる。地域レベルで実施される講演会や講座は手軽で参加しやすいし、地域の人たちと知り合う場としても有効である。

²⁵ 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説—国語編—』、文部科学省、平成29年7月、24頁。

²⁶ 中学校学習指導要領(第2章第1節 国語)において各学年の目標は「我が国の伝統的な言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。」とされており、これは中学校3学年で違いない。『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説—国語編—付録3』、文部科学省、平成29年7月、158-162頁。

中学校での学習には、小学校までの学びを引き継ぎ、高等学校や社会での学びへとつなげていくという役割がある。そのためには、中学校における3年間の学びを単発ではなく、層として積み重ねていくこと、つまり、1年生の学びを2年生の学びの下地とし、1・2年生の学びを3年生の学びの下地とすることが必要である。特に「古典」においては興味・関心を持つような教材を2年、3年と積み重ねるカリキュラムを構築することで、子どもは「古典」が持つ楽しさや奥深さを知ることができると思う。

③. 生徒が生涯学び続けるための基礎となる活動を取り入れる

中学校でのさまざまな学びは、社会で生きるための基礎基本であると言われる。子どもはその学びに年々知識や経験を積み重ね、社会で学び続け、生きていく。しかし、「古典」についてはその基礎基本となる内容が脆弱である。つまり、古典が持つ楽しさや奥深さに触れられないまま終わるため、「古典は難しい」「古典は面白くない」という印象が強く残り、昨今の「古典不要論」へとつながっているのではないだろうか。

しかし、中学校段階で古典が持つ面白さや奥深さに触れる機会があれば、子どもは卒業後生きていく中で、その記憶、経験につながるモノ・コトを意識することができ、それを知り、深めようという意識へとつながっていくと考える。

おわりに

今回の授業実践の結論として、「古典籍にふれる授業」と「昔のローマ字を読む授業」は、中学生が古典に対する興味・関心を持つとともに、「主体的・対話的で深い学び」へと促される場として成立するということである。

しかしながら、今回の実践には課題が多くあることも分かった。この授業を、誰もが実践できる教材として成立させるためには、教材の使いやすさが求められるだろう。また、生徒が今後、中長期的に学び続ける基礎となる活動を、授業の中にどのように取り入れるかについても一層の検討が必要だろう。今回の教材が単発の「飛び道具」として使われるのではなく、古典を継続的に学習する最初の「道しるべ」として、より多くの生徒が古典に興味・関心を持つ動機となることで、はじめて意味を持つと考えている。